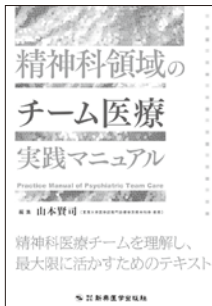


■ 書 評



精神科領域のチーム医療実践マニュアル

山本賢司 編著
 新興医学出版社
 2016年2月 154頁
 本体価格 3,300円+税

精神科に限らず、医療全体でチーム医療が提唱されて久しい。チーム医療とは、医師だけでなく多くのコメディカルがそれぞれの専門性を活かしながら協働してよりよい医療を進めていくこととされている。厚生労働省もそれを推進している。精神科領域に限定しても、総合病院における精神科リエゾンチームや緩和ケアチームなどのように、要件を満たせば診療報酬上も有利になるチーム医療活動がある。しかし、広義のチーム医療は総合病院だけで行われているのではないことはいうまでもない。1950年代にマックスウェル・ジョーンズが唱えた治療共同体は歴史的な試みであっただけでなく、今なおその意図を実践しようとしている医療者は少なくないであろう。また、精神科病院や精神科クリニックで行われているデイケアも、まさしく多職種協働の活動である。認知症や精神疾患の患者を対象としたアウトリーチサービスも、医療と福祉が渾然となった活動である。

これら精神科領域でのチーム医療では、主治医であつたり病院管理者であつたりする精神科医が必ずしもその活動の最も重要な部分を占めるとは限らない。もちろん管理する上での最終的な責任者とされることは多いが、むしろ精神科医に期待される役割は全体を見渡して適切に運営していくことであろう。精神科医療は病院やクリニックでの医学的な介入だけで治療が完結することができないので、精神科医は他科の医師と比べれば行政や福祉関連の組織との協働には慣れているかもしれない。しかし、精神科医がいままでチームワークやリーダーシップなどについての研修を受ける

機会は少なく、その知識も乏しいのが現状である。このような精神科医に向けて本書が出版されたのは、まさしく時宜を得た企画なのではないだろうか。

本書は非常にまとまりよく編集されている。全体は大きく総論と各論に分かれている。総論は全体の1割で、残りはほぼ均等に各論に分配されている。各論では精神科病院での入院治療、デイケア、リワーク、精神科リエゾンチーム、緩和ケアチーム、救急医療、認知症地域支援の7つの分野でのチーム医療について論じられている。総論は編著者が担当し、各論はそれぞれの分野で実際に活躍している先生たちが執筆されている。それぞれ書きぶりが異なっていて、読み物としても興味深い。チーム医療のすばらしさを情熱的に主張する著者もいれば、チームの立ち上げや維持に必要な要件を丁寧に記述される著者もいる。前者の主張は、1日中診察室の中だけで仕事をしている精神科医の目を外に向かせる大きな刺激となるであろう。また、後者の記述は今後チームを立ち上げていこうと思っている人たちには貴重な情報となるに違いない。チームの立ち上げには情熱が必要なのはもちろんのこと、適切なメンバーの選択や仕事の分担配分の決定、チームを維持するための枠組みやノウハウ、さらには常に前を向いていくためのモチベーションや理想が必要であろう。執筆者の記述からはこれらの要件が自然と浮き上がってくる。

本文はすっきりとしたレイアウトになっており、メリハリがあつて読みやすい。また、これは編者の知恵なのかもしれないが、大きな表がいくつも挿入されている。たしかに、多職種が参加するとなると、それぞれがどのように活動しているかを俯瞰するためには、頭の中に表を作って整理していくのが最善であろう。その表がすっきりとした体裁で本文中に挿入されている。チーム医療の理念を勉強したい、現在チーム医療を行っているがうまくいかず困っている、あるいは今後新たにチーム医療を立ち上げようと企画している精神科医に強く推薦したい。

(仙波純一)